転覆

海運・大型乗っ取り事件

本所次郎

講談社文庫

定価480円

転覆（てんぷく）　海運・大型乗っ取り事件

本所次郎（ほんしょじろう）

昭和57年4月15日第1刷発行

発行者　三木 章

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112

電話　東京（03）945-1111（大代表）

振替　東京 8-3930

デザイン　亀倉雄策

製　版　株式会社東京印書館

印　刷　株式会社東京印書館

製　本　株式会社千曲堂

© Jiro Honjo 1982

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131757-1

転覆

——海運・大型乗っ取り事件——

本所次郎

講談社

目次

第一章　発火
株価急騰……七
次官と社長……一三
野党精神……二一
弱者の屈辱……二六
伝統と人材……三二
国家と商人……四九
交渉決裂……五〇
守戦の苦渋……六六
巻き返し……七三

第二章　炎上
開いた幕……一七五
死人の口……一九二
グローバル……二一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

上海の昔……二三〇
大物の正体……二五〇
黒幕の実像……二七〇
二枚の委任状……二八八

第三章　余燼

原油入札……三一〇
国会質問……三三七
献金の効用……三四五
旧友の出現……三五九
協定成立……三七九
事件の真相……四一一

解説　佐高信　四四四

転覆

海運・大型乗っ取り事件

この小説はフィクションであり、ストーリーの構成上、仮りに、モデルと酷似した人物が実在したとしても、何ら筆者の意図するものではない。　筆者

第一章　発　火

株価急騰

エースラインの株価が蠢動したのは、わが国の経済界がニクソン・ショックに揺れ、混乱と暗中模索に明け暮れていた昭和四十六年十月のことである。

その年の夏、海運市況はタンカーを中心に急速に落ち込んだ。

百日に及んだ米国西岸の港湾労働者ストのあおりで、荷揚げできずに沖待ちした日本船の損失は、ざっと百億円の巨額に達した。さらに、戦後一貫して維持されてきた一ドル＝三百六十円の固定為替相場が、変動相場制へ移行したことで、為替差損という目に見えない〝怪物〟を生み、大方の者はその実態を十分に把握できなかったのに加えて、戦後初めて遭遇したこの〝怪物〟に対する経済界の不安が、海運業界をも巻き込み、大きな渦となって回転していた。

魔の夏を経過したエースラインの九月期決算は、当然、業績悪化が予想され、株価は額面の五十円を上下していた。しかし、月半ばからジリ高に転じ、五十七円で月を越した。そして再びジリ安歩調となり、十一月五日には五十円の額面にはりついた。兜町の誰もが、この時点では、エースラインの株価動向に、ことさら注意を向けることはなかったのである。

それが突如火を吹いたのは、週明けの八日からである。十月までは一日当たりの出来高が、せ

いぜい十万株から二十万株だったのが、その日、百万株に近い大量の成行き買いが入り、一気に八円高となった。

翌日には、前日の二倍に当たる二百万株の買いが入り、底値で摑み、売り機会を待っていた大口の利食い売りが一斉に放たれはしたものの、さらに五円高となった。

「クロスか？」

「いや、特定の者の現物買いらしい」

二日目にして、早くも証券界の臆測が乱れ飛んだ。

三日目。東の兜町、西の北浜で、エースライン株の大口買いは続いた。

「買いは三星海運らしい」

「なに？　証券会社はどこだ!?」

「松下証券を頭とする北浜の中小証券数社ということだ」

八月のニクソン・ショックで大暴落を演じ、意気消沈から立ち直るのに未だしの株式市場にとって、理由は二の次、買いで株価が上がることは大歓迎だった。現物取引に乗って、信用買いとカラ売りが交差、一千七百万株の大商いとなった。エースラインの株価は、その週だけで三十三円高、九千万株に達する出来高を記録した。

十一日の木曜日、大新聞の何紙かが経済欄で、

三星海運がエースライン株を買占め

と報じたことは、燃え上った市場の火に油をそそぐ結果となった。しかし、いずれの記事も、兜町と北浜の噂を根拠としたもので、それぞれ三星海運は「その事実はない」と否定、一方のエースラインは「三星に問い合わせたところ事実無根とのことだった」との両社首脳の談話を載せていた。

いかに当事者同士が事実無根と否定しても、翌週も大商いが続いた。わずかの間に、仕手戦の様相を帯びはじめた。一日の出来高がコンスタントに二千万株を記録した。エースラインの資本金百七十七億円、総発行株式三億五千四百万株であるから、およそ資本金の六パーセントに相当する比率である。株価は毎日、高値を更新していった。

十八日、木曜日。株価は百円の大台に乗せた。

十九日に至ってエースラインは緊急取締役会を招集した。

ただ一人、社長を除き、監査役二名を含めた十九名の全重役が会議室に二列に向い合って坐っていた。全重役が出席する会議は、普段めったにないことだった。それだけこの会議の内容がいかに重大なことであるか、出席者全員が承知していた。煙草を吸い、あるいは腕組みをし、時折、咳ぶく者もいたが、誰もが一様に空間を睨み、黙りこくっていた。この十日間余り、各人がそれぞれに思い廻らした推理に対する解答が、間もなく出ることへの期待、そしてもしや、その期待の裏に隠された不安な事実に関する緊張が入り混っての所作にほかならなかった。

社長の川畑喜一が、総務部長の大木大造と秘書課長の吉岡直人に両脇を支えられるようにして入室したのは、午後四時半に近かった。室内の視線を一斉に受けて、川畑は我が身をかばうよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

に、前かがみに一歩一歩時間をかけて歩き、奥の中央の席にゆっくりと坐った。
川畑は持病の狭心症が悪化して、三日間、会社を休んでいた。それを押しての出席は、エースラインが置かれた現実に対し、社長の川畑が強い危機意識をもっていることを物語っていた。
顔面蒼白、肉付きのよい頬をわずかに痙攣させながら、上衣の右ポケットから茶色の小びんを取り出した。ふるえる両手で、小びんから小豆ほどの白い錠剤を手の平にのせ、口に含むと、暫く閉じた口の内で舌を動かした。狭心症発作を鎮めるため、川畑がいつも携帯しているニトログリセリンの服用である。
その動作の一部始終を全員が凝視しつづけた。長身の女子事務員が川畑の前に茶を置き、軽い会釈をして部屋を出た後、彼はなお小刻みにふるえる手で茶を一口飲んだ。それで一息ついたのか、やっと口を開いた。
「いや、失礼した……。ところで、この会議は誰が招集したのかね?」
その声は小さく、低かったが、腰の強い響きをもち、語尾に詰問口調の怒気が感じられた。
それまで川畑に集中していた視線の束は、一瞬、角度を変えて、あらゆる方向に散乱した。窓先には夕闇が迫り、大きなガラス窓に、室内の軽い動揺が映し出された。そして散乱した視線が、再び眼鏡の奥から上目づかいに室内を見据える蒼白な下ぶくれの顔に戻ろうとした時、川畑の右手三番目に坐っていた筆頭常務の富田治男が、緩慢な動作で立ち上った。
「私です……」
「――君は、重役会の招集をかける権限があるのですか?」
「むずかしいことはわかりません。しかし、ひと言説明させていただきますと、事は緊急を要し、

重役諸氏にできるだけ早くお知らせしたかったからです。もちろん、まず社長にお知らせしなければならないことは、私とて十分承知していました。しかし、社長はお体の具合がおもわしくないとのこと、いらぬ心労をかけてはいかぬと思い、あえて事前にお知らせしなかったわけです」

「それはありがとう。で、君は独断で招集をかけたのですか？」

「――――」

富田が返答につまり立往生しかかった時、富田の左隣りの中田達也専務が、椅子にそりかえり、腕組みをしたままの姿勢を川畑に向けた。

「富田君から私のもとに相談があり、皆さんに至急集まってもらった方がよい、と私が言ったんですがね」

短軀でずんぐりした富田常務が、眼鏡越しに神経質な視線を投げかけるのに対し、重役の間では百七十五センチという一番の長身を誇る中田専務は、向っ気の強さを横柄な態度に表わしていた。

「むしろ静養中のあなたを、無理にこの席に連れ出す者の神経に私は疑問を感じる。ともあれ、いま当社は重大な局面を迎えている。独断かどうか、権限のあるなしに拘らず、スピーディーな処置が必要なことは、言うまでもありますまい」

一方的にしゃべると、中田は腕組みの姿勢を正面に戻した。同時に富田も着席した。

「中田君、ちょいと聞くが、君はいつから社長代行をつとめるようになったのかな。君の上には、席順では三人いる――」

中田の向いの列の左端から甲高い声が飛んだ。筆頭専務の長戸重兵衛だった。社長の川畑より

三歳年長の六十八歳、痩身に古武士的な風格があった。船長あがりの男で、私心のない性格が海務担当重役として今日の地位を成さしめた。それだけに物事を見る眼は公平、親分肌のところもあり、船員には〝おやじ〟と呼ばれ、圧倒的な人気をもっていた。半面、一言居士、御意見番として煙たがれる存在でもあった。

「まず社長の川畑君、そして副社長の山野君、それにボクだ。そのボクが君から相談されなかったことは脇に置くとして、今話を聞くと、川畑君自身も呼び出された口という。先程、山野君に会議の内容を尋ねたら、社長が招集をかけたんだから詳しいことを知らんという。ということは、代表権を持つ社長、副社長の二人とも相談を受けなかったということになる。どうかな山野君?」

「おっしゃる通りです」

中田の左隣りの上座に坐る副社長の山野良一は、白髪のまじりはじめたざんばら髪をかきあげながら、張りのある声で無造作に答えた。黒縁眼鏡の奥の眼は澄み、全身の所作は、どこか書生っぽさを感じさせた。

「ボクは商法の細かいことを知らんから、この取締役会が成立しないなどと言うつもりはない。だがね、社内秩序は重んじなくちゃいかんよ。命令系統が二本になることによる混乱を、君は知らんわけでもあるまい。確かに臨機応変の措置が必要な時もある。この場合、ひと言、山野君に声をかけるのが筋ではなかったかな——。いや、失礼、大事な時にいつもの癖で、また年寄りの長広舌となってしまった」

長戸は甲高い声で、一人悦に入るように笑った。中田は不快の色を隠そうとせず、腕を組んだまま横を向いていた。

「長戸さん、ありがとうございました。では、やっていただきましょう」
　川畑社長は長戸の発言で少し溜飲を下げたのか、また分別からか、それ以上、中田をとがめなかった。総務担当の筆頭常務である富田が、再びずんぐりとした体を両手で支え立ち上った。
「今回の当社株式の急騰に関し、一部で買い占めの噂もあり、私どもとしては放置するわけにはいかず、当社の幹事証券会社および取引銀行、それに二つの興信所に調査を委託しました。その調査の第一報が、昨日、ほぼ手元に届いたわけですが、まず推測まじりの結論から申しますと、現物買いは北浜に集中しており、買い大手はすでに名前が登場している松下証券、それに吉田証券ほか四社の買いが目立っているとのことです。これら証券会社は取引所の正会員ではなく、自己売買や端株取引で特定の客を摑んでいる中小証券ですが、六証券の十一月に入っての現物買いを集計しますと、株数でおよそ三パーセント、一千万株強と推定されています。短期間のことでありますから、三パーセントという数字はまさに驚異でありますが、買い手は浪花ダラーとする報告と同時に、日本証券と興信所の一社の報告書の中に、瑞穂汽船という名前が掲げられているのは注目に価すると思います。すでに買い占めの主役は三星海運と新聞で報道されていますが、瑞穂汽船の実態は三星海運のダミーであると報告書に記されているからです」
　ここで富田は話を区切り、手にした調査報告書から眼を離した。室内にかすかなどよめきが起った。
「三星のダミーというのは、その書類では断定しているのですか？」
「いえ、最もはっきり述べている興信所のそれでも、可能性が極めて濃い、との表現を使っております」

「曖昧な部分が多いということですね」
「いえ反対です。後で皆さんに回覧しますが、これまでの株式市場における三星の特異な行動からしても、かなり信憑性があると思います」
「それはあなたの主観ですか」
「――――」
川畑社長は富田の答えを期待する風もなく、右手を額にあて、暫く考えるポーズをとった。
「社長は先週、三星の龍さんに会われたでしょう。その時、聞かなかったんですか」
中田専務が煙草に火をつけながら、室内の沈黙を破った。
「会いました。しかし、その事実はないと言ってました」
「龍さんの言をまともに受けるわけだ」
中田の口調には、いつも皮肉な険がある。
「龍さんとは長い付合だし、私は、龍さんの人柄を信じ、また龍さんも私を信じていると思う」
「相思相愛ですな。しかし、あそこには山県隆という切れ者の専務がいる」
「――三星は龍さんでもっている会社です」
「龍さん、龍さんと言われるが、社長は今回の件で、何か密約でもあるんですかな」
「君は……。君は何を……」
予期せぬ発作が川畑社長の身を襲ったのはそのときであった。中田へ何ごとか反論しようとした川畑社長の語尾がかすれた。
同時に、その両手は左胸にあてられ、上半身が屈折した。どす黒く変じた顔面、そして禿げ上っ

た額に大粒の汗が浮いた。大きく両肩で数回にわたり不規則な息をついた。そして白眼を出し、詰まるような小さな唸りを発すると、川畑は頭をテーブルに置き、そのまま両手で左胸を押えたかたちで動かなくなった。わずかな、ほんのわずかの時間、咄嗟の出来事であり、誰もが残像と余韻で、いま起った事実が何であるかを確かめようとしていた。

七分後、救急車の担架が運び込まれた時は、すでに息を引きとっていた。心筋梗塞症の発作による急死だった。

時に六十五歳、運輸省海運局長から衆議院議員を一期四年務めた大物社長には、殉職が一番ふさわしい死に方だったとは言えるかも知れない。しかし、エースラインの受難は、社長の死という不幸な突発事のなかで幕を開けたのだった。

三十日の株主総会を十日後に控えての川畑社長の急死は、株式買い占めが噂の段階から真実性を帯びはじめた時期だけに、各方面の注目を集めた。一部の新聞は、名前の横に太い黒線をそえた死亡記事のほかに、経済欄にも囲み記事で、株買い占めとの関連で川畑の死がエースラインに与える影響を推測、次期社長は副社長の山野良一の昇格が確実だが、合併会社として社内的には人事面でのトラブルがある、と報道した。

エースラインは、昭和三十九年の海運再編時に、定期船中心の東洋商船と不定期船、タンカーが主力の同和海運が対等合併、海運中核体六社の一社として新発足した。営業規模は当時から中核体の四位と変らないが、この七年間タンカーを中心に業績を拡大してきたことに経営的な特色があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor